

P-181 唾液中プロゲステロン測定による黄体機能の評価—連日測定による正常基準値設定の検討

唾液 P 臨床研究会 (旭川医大他 4 機関、責任者: 石川睦男)

玉手 健一

【目的】黄体機能評価法として血中プロゲステロン (P) の頻回測定が推奨されているが、臨床不可能であることが多い。そこで採取が容易な唾液中Pに注目し、黄体期の連日測定による正常基準値の設定および黄体機能不全診断における診断効率に関し検討した。【方法】性成熟期婦人 162 例を対象として、尿中LHサージ開始日 (Day0) より次回月経開始日まで連日唾液を採取しPを測定するとともに、黄体中期に3回血中Pを測定した。基礎体温表および血中P値より 1) 黄体機能正常群 2) 不全群 3) その他に分類し、唾液中Pの基準値の設定および基準値に基づいた黄体機能不全の診断効率に関し検討した。さらに、血中Pの唾液への移行率を分析した。本検討はインフォームドコンセントおよび倫理委員会の承認を得て行った。【成績】162例中135例が評価可能であり、正常群 58例、不全群 43例、その他 20例であった。正常群ではDay0-4には唾液中P値は経時的に上昇し、Day5-9に 100 ± 54 pg/mlとピーク値を取りその後減少した。黄体中期の正常値は30.95-184.44pg/mlに設定された。不全群では正常群に比較しDay3-10で有意な減少を示し、ROC曲線の検討から60pg/mlをカットオフ値に設定した場合、感度79.6%、特異度75.6%で黄体機能不全の診断が可能であった。また、この値は血中より唾液への移行率が6%であることより血中P10ng/mlに相当した。【結論】唾液中プロゲステロン値の黄体期の正常範囲を設定し、カットオフ値60pg/mlにより黄体機能不全の診断が可能であることを明らかとし、唾液中プロゲステロン測定の臨床上的有用性を示した。

P-182 ギナドトロピン分泌異常を伴う排卵障害におけるギナドトロピン受容体の遺伝子解析の試み

滋賀医大

竹林 浩一, 高倉 賢二, 木村 文則, 野田 洋一

【目的】早発卵巣不全(POF)及び多嚢胞性卵巣症候群(PCOS)はギナドトロピン分泌異常を伴う排卵障害をきたす症候群であり、その原因は染色体異常などの細胞遺伝学的要因、代謝異常、免疫異常など多岐にわたると考えられているが、殆どの場合はっきりとわかっていない。最近FSH受容体遺伝子異常によるPOFの症例が報告されたが、現在まで日本人排卵障害患者においてFSH受容体遺伝子の変異が存在するかどうか調査した報告はなかった。今回我々は日本人のPOF及びPCOS患者を対象として、FSH受容体遺伝子異常の有無について調べた。【方法】当科生殖内分泌外来においてPOF及びPCOS患者のうち、インフォームドコンセントによって試料の提供の同意が得られた57例を対象としてこの研究を行った。尚この研究を開始するにあたっては当施設の倫理委員会の承認を得たのち着手した。まず57例の患者末梢血からゲノムDNAを分離し、これまでわずかながらPOFにおいて変異が報告されているFSH受容体遺伝子のエクソン6, 7及び10をPCR法にて増幅した。これらのPCR産物を制限酵素にて消化し、変異の有無を解析した。またPOF患者(9例)の末梢血を用いてRT-PCR法にてFSH受容体遺伝子のエクソン10を増幅し、DGGE法にて変異の有無を調べた。【成績】我々が調査した検体には報告された遺伝子変異は認められなかった。【結論】少ない症例数ではあるが、日本人におけるPOF及びPCOS患者においてはFSH受容体遺伝子異常がまれである可能性がある。

P-183 子宮内膜、脱落膜、絨毛におけるIL-16の産生

日本大

石井眞木, 早川 智, 千島史尚, 佐藤和雄

目的 IL-16はT細胞, 単球, 好酸球の遊走促進因子として知られるサイトカインである。近年IL-16がCD4抗原をそのレプターとしCD4細胞の活性化と不応性を誘導する事が明らかになった。IL-16が粘膜免疫系である脱落膜におけるリンパ球の活性化と不応性に関与する可能性を検討した。

方法 informed consentを得た上で増殖期(4例), 分泌期(3例)の子宮内膜, 人工妊娠中絶による初期絨毛(4例)および脱落膜, MACSにより分離した脱落膜CD56⁺細胞とCD56⁻細胞におけるIL-16 mRNA発現をRT-PCRによって検討した。また蛋白レベルの産生をELISAにより検討した。

成績 子宮内膜組織は構成的にIL-16 mRNAを発現し分泌期において増殖期より強い発現をみた。脱落膜組織、CD56⁺細胞に強い発現を認めた。絨毛組織、初代培養細胞にも発現を認めたが絨毛癌細胞株には発現をみない為間質由来と考えられた。脱落膜CD56⁺細胞は構成的にIL-16を産生し、IL-2 100IU/ml刺激あるいはprogesterone 10^{-6} - 10^{-8} mol/lの存在によって産生増強が見られた。

結論 子宮内膜, 脱落膜, 絨毛間質細胞は構成的にIL-16を産生する。脱落膜リンパ球の主体であるCD56細胞が産生するIL-16は局所における母体免疫系のanergyに関与する可能性がある。IL-16はHIVのCD4細胞に対する感染を強く抑制する事からHIVの垂直感染の局所防御にも関与する可能性がある。